



TITLE:

東京天文臺長の新任：卷頭言

AUTHOR(S):

CITATION:

東京天文臺長の新任：卷頭言. 天界 1928, 8(86): 201-203

ISSUE DATE:

1928-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161282>

RIGHT:



東京天文臺長の新任

(卷頭言)

かねて噂されてゐた平山信教授の定年辭職が去る三月末に實現し、こゝで四月4日、新東京天文臺長として早乙女教授の任命を見たことは、いろいろの意味に於いて慶賀に堪えない。

平山信博士の學蹟については他日稿を改めて詳論する機會を得たい。早乙女博士の新任といふことは、吾人が可なり以前から多少の自信を以つて豫想、且つ、希望してゐた所であつて、今此の事が公けに決定されたことを心から喜ぶものである。

そもそも一天文臺の「臺長」職なるものは決して單なる榮譽の地位ではない。自分は先年外遊の機に多くの天文臺を訪ねて、親しく各所の天文臺長と其の人格に接し、益々此の感を深くした經驗を持つてゐる。自分の信する所に據れば

- (1) 天文臺は天文學研究上の一王國であつて、其の職員間には調和と統一と協同精神の圓滿な發現が認められなければならない。故に此の見地からすれば天文臺長は此の王國の君主であつて、天文臺全體を支配し、號令し、指導し、愛撫激勵する能力者であらねばならない。近代に於ける理想的天文臺長として、ハーバード天文臺の故ビケリング教授、リク天文臺の現カンベル博士、プリンストン大學天文臺の現ラッ

セル教授、エール大學の現シレシンジア教授等の聲名は廣く世の知る所である。天文臺長は同時に天文研究者であるのが普通であるけれど、上述の條件から見れば之れ必ずしも必要でない。ヤーキース天文臺の現フロスト教授の如きは數年前から失明してゐるけれど、今尚ほ臺長として有力に活躍してゐる例を見てわかる。——此の意味に於いて、天文臺長は學界の權威者でなければならない。

- (2) 天文臺長は常に學界全般の事情に通じ、部下の指導を圓滿に遂行しなければならないために、其の腦裡は決して或る特別論題のみを以つて充滿してゐてはならない。たゞひ臺長自身は特殊問題の研究に没頭するを本分としてゐても、他の一面に於いては極めて博識と常識を持ち、あらゆる問題に對して偏見と無關心とを避けねばならない。フロスト氏がバーナム、バーナード等の先任者を超えて、ヤーキース天文臺長となり、又、エイトケン氏が先輩タカー氏等を抜いてリク天文臺(副)長に擧げられたなごは此の好例と見てよからう。
- (3) 天文臺長は部下職員の統一者として、又、他の學的社會との交渉代表者として、完全なる人格者であらねばならぬ。此の意味に於いて現今自分の知る多くの天文臺長は實に憬慕すべき紳士淑女である。ライデン大學のデシター教授、グリニチ天文臺のダイソン博士、ワシントン海軍天文臺のアイクルバーガー博士、ベルゲドルフ天文臺のシヨア教授、マウント・ホリヨク學院のヤング女史、ローエル天文臺の大スライファ博士など、皆、玉の如き人格者である。

平山信博士を失つた東京天文臺に於いて、後任の天文臺長に擬せらるべき候補者を二、三、吾人は耳にした。しかし、上述の理想より見て、早乙女清房教授が此の際最も適任者であることは、かねて吾人もひそかに信じてゐた所である。今回の任命が果然吾人の信する所を實現した形になつてゐるのは喜びに堪えない。或人は早乙女氏の今回の任命を以つて異常なる拔擢であると言つてゐるが、吾人はむしろ之れを、總明なる推薦者の正に當然な判斷によると見る。——年輩から言つても、早乙女氏は明治32年度の大卒業者で、今年はや50歳であるから、學者として、又人として、最

も活動力に富むと言つて好い。

早乙女博士は大學卒業後、直ちに大學院に入り、又、東京天文臺の助教授、教授に歴任した人であつて、かつては、天頂儀による緯度變化觀測を行ひ、其の結果、天文水準器の特殊研究に貢獻した所が大きい。其の後、又、天文用時辰儀の特性を研究して、大正 11 年には「博士」の學位を得た。言はゞ、東京天文臺に於いて可なり珍しい型の實際的天文學者である。全世界の多くの天文臺の例にもある通り、實際的天文家が今回始めて臺長に任命されたことは將來の東京天文臺のために大なる轉機であらねばならない。

權威者・博識者・人格者としての天文學者早乙女博士は、一面に於いて、天文學の社會的普及熱心家である。さきに我が天文同好會の組織せらるゝや東京方面から眞つ先きに進んで入會を申し込まれたのは實に同博士である。尙ほ、かつて東京の日本天文學會の理事長でもあつた。又、現にドイツ國ベルリン市にあるトレプトウ天文臺の贊助者である。又、最近二三年間、東京放送局から天文學を放送講演された人々のうち、東京天文臺からの唯一人者であることは既に廣く知られてゐる。

今や我が國は眞に希望に富んだ「天文時代」に入らんとして、前途は可なり多事ならんとしてゐる。外國に比べて凡そ一世紀も後れてゐた器械的設備も最近頗に進歩し、且つ、將來近く大飛躍の行はれんとする氣運が、學俗間一般に認められてゐる。又、一般民衆の間には近代的天文學の智識が極めて着實なる步調を以つて普及しつゝある。東西の學府には熱心なる少壯天文學者が雲の如く集まり、止むを得ず「撰援試験」によつて彼等は學研生活の中に引き入れられつゝある。(こんな例が外國の何所の大學にある?) 此の時に際して、聲望ある天文臺長の新任は、常に一東京學府の喜びのみならず、むしろ全國學界の喜びでなければならない。(山本)
